

老舍『帰去来兮』試論

渡辺武秀[†]

On Lao She's "Gui Qu Lai Xi"

Takehide WATANABE[†]

概论

“归去来兮”是老舍先生在 1942 年创造的话剧剧本，也是他的第六部话剧。

在“归去来兮”剧本的故事情节里，老舍先生所讽刺的主要是在抗战时期商人的投机倒把的行为。

剧本的主人公——乔绅，可以说他是这种商人的代表性。到抗战的时期，乔绅唯利是图：他趁国家面临危难，社会动荡不安之际，靠囤积居奇大发横财。他从不关心抗战，也不顾民族的存亡，无意地这种行为同时也削弱了抗战的力量。

剧中，他的儿子乔仁山当得知父亲做的买卖，是发国难财时，使得原来很喜欢父亲的他，也开始经常反对父亲的言行了。但是，作为父亲的乔绅却不能理解儿子的真正的意图，反而更加讨厌起自己的儿子来，动不动就辱骂他。这样的事，乍一看好像是家庭内的父子对立，但实际上里面反映的是国家存亡的问题。最后，乔仁山毅然离开了父亲，去参加抗战了。乔绅也随着儿子、朋友的相继离开，而彻底陷入孤立的境地，渐渐地开始思索——自己是不是地方做错了。

Key Words: Lao She, war, Speculation business

キーワード: 老舍, 戦争, 投機商売,

1. はじめに

老舍は 1939 年から劇を創作し始めた。これ以前に豊富な小説創作の経験はあったけれど、劇というジャンルの作品を書いた経験は全くなかった。最初の劇作品は『残霧』(1939)である。この後続けて『国家至上』(1940)『張自忠』(1940)

『面子問題』(1941)『大地龍蛇』(1941)を次々と書き、今回取り上げる 1942 年の『帰去来兮』が老舍自身の劇としては第六作目となる。(注 1)

すでに、老舍の従前の五つの劇については考察したことがある。(注 2)今回は、その成果に基づき、引き続き、この『帰去来兮』を論じてみたい。

これらの劇作品はどれも、テーマからして、すべて「抗戦劇（「抗戦」というのは日本軍の侵略に対する抵抗の戦いという意味で使っている）」ということができよう。だから、どれも、

平成 23 年 1 月 14 日受理

[†] 基礎教育研究センター・教授

劇を観客に見せることで観客の気持ちを「抗戦」へと向かわせることを目的に書かれたものといえる。この点では、「抗戦劇」であるかぎり、どれも、たとえ他の作家の場合でも、基本的には同じだと考えることができる。だが、「抗戦劇」とはいえ「観客の気持ちを「抗戦」へと向かわせる」その方法は、例えば劇の構成、展開、言葉の選び方、作品の根底に窺える人間、文化の捉え方といったものは、各作品、各作家によって異なっており、ここに「抗戦劇」を書く作家の個性、独特の作品世界があると考えている。

今回、この小論で行うのは、老舎が彼独特の考え方、創作法で如何に「観客の気持ちを「抗戦」へと向かわせ」ようとしているのか、そしてさらに、以後も老舎は劇を書くことになるのだが、その劇へと展開する、その仕方といったことを見極めることである。

この時期の老舎の劇は、どれも「抗戦劇」であるが故に「抗戦」が終わってしまえば無用の長物の如き印象を持たれ、上演されないのはもとより、これまで余り顧みられることすらもなかったように見受けられる。また老舎自身も確かにしばしば自らは「劇の創作は素人だ」(注3)という発言をしており、初期の劇に対する評価もこれによって行われ、一般的に習作の域を出ないとされることが多い。(注4)だが、彼の劇作品そのものを一つ一つ仔細に検討してみると、劇の完成度はかなり高く、また、従前の小説のジャンルから辿ってきた者には、例えばこれまで小説で取り上げていたテーマ、その表現の仕方が「抗戦」に直面して微妙に変化していることが見て取れるように思う。(注5)

2.

この『帰去来兮』を一読すれば、すぐに、これまでの老舎の劇にない部分があることが分かる。まず目につくのは、この劇で、「抗戦」で戦死した息子のいる商人の家庭を取り上げて

いるところである。このことを扱った白話劇はこれまでない。ここから考えて行こうと思う。

息子の戦死を暗示するのは小道具である。これに関して、作者は第一幕のト書きに、以下のように注文をつけている。

○室内には多く、少なく、好きに物を置いて良いが、ただ次の二つのものは絶対に欠かしてはならない。一つは電話と帳簿である。それから、もう一つは、喬家の長男の遺影である。この遺影は、鉛筆か或いは炭で描かれものであつて、かなり大きく、かなり目立つ場所に掛けられているというのが最も望ましい。(注6)

この作品には喬家が描かれている。劇の場面は喬家の書斎兼事務室。ここは商人の家であつて、部屋には帳簿、算盤が置かれている。

この家の主人は喬紳という人物で、妻は具体的な名前は設定されず「喬の妻」とだけ示されている。主人の長男が徳山、長男の嫁が李顔、次男が仁山、三番目が娘の莉香であり、また主人には妾がおり、桃雲という。他に、喬紳には将来娘の婿にと考えている人物がいる。彼の名前は丁影秋である。

喬紳の友人に画家の呂千秋という人物がいる。彼には妻は既になく、一人娘がいる。呂以美という。呂以美は喬紳の店で仕事をしている。

この喬紳の家族の中で「抗戦」に参加して戦死したのは、この喬家の長男、つまり喬紳の息子で、徳山という人物である。ところが、舞台に置かれた小道具で明らかのように、この長男の遺影が驚くほど粗末なのである。

この点を、実際に、登場人物の一人、呂千秋に遺影を見ながら次のように発言させている。

○徳山は国家のために血を前線に流したのだ。それがどうだ、この劣悪な汚い絵でもって、彼の記念としている。(怒って)彼らに、一体全体、心というものがあるのか。……(略)……彼らの光栄ある息子さえもこんなふう扱っている……(略)……ひどいもんだ、これじゃまるっ

きり死んだ人をわらいものになっているじゃないか。(注7)

舞台の小道具や、この台詞から、喬家の主人、喬紳は「抗戦」に参加して戦死した長男に不満を持っており、呂千秋は喬紳の長男の戦死に対する扱い方に憤慨している、ことが読み取れる。

一般的（或いは普通といるかもしれない）に、親であればもし「抗戦」で日本軍に自分の子どもが殺されたのなら、敵である日本軍に激しい怒りが生じ、日本軍に対する「敵討ち」を叫ぶのが自然の反応であろう。ところが、長男の遺影の様子からすれば、この作品の父親の喬紳には、このような気持ちがまるでないかのように見て取れる。激しい悲しみや怒りでこのようにしてしまったのか。いやどうもそうではないらしいのである。このことは、実際の、喬紳自身の発言から分かる。

○ どこであれ死ぬのは良くはないが、よりによって前線なんぞで死んだのだ。ワシは怒り狂った。次男は今日帰ってくる。あいつは死んではないけれど死人と変わりはない。(注8)

「抗戦」に自ら進んで参加し、その挙げ句に戦死するなど「馬鹿なヤツ」と思っているらしい。

このように、この作品は、「抗戦劇」でありながら、この作品の主人公の喬紳は「抗戦」に参加する意義を認めていず、寧ろ「抗戦」で死んだ長男を英雄視するどころか軽蔑するといったふうな、いわば「抗戦」を期待する観客側からすれば、意表をつく始まり方をしているのである。

3

この劇には、直接文字で書かれているわけではないが、舞台の進行によって、次第に分かってくるものが幾つかあると考えている。

この部分は、本来なら、劇の総てを見終わっ

た後、最終的に理解できるところでもあるが、作品の解釈の根幹に関わり、これを理解しなければ、おそらくこの作品を正しく解釈することはできないと考えるので、具体的な作品分析に入る前に、まず最初に、ここで述べ、明らかにしておくことにする。そして、この部分を解釈の根底に置き、この劇のストーリーの内容、その展開、そこで表現されている台詞の内容を分析、解釈して行くこととする。

それは、二つあると考える。

(1) この『帰去来兮』の前提には、中国の伝統的な商売に対する考え方があるということである。これは、或いは当時の観客である中国人には常識であったかもしれない。これが、この作品の中心人物である店の主人、喬紳の商売の仕方に入り込んでいると考える。

老舍は、小説というジャンルの作品にはすでに商人を主人公にした作品を幾つか書いている。(注9)これらに、ひとつの中国の伝統的且つ典型的な商人の考え方が描き出されている。それは、中国には、伝統的に、あらゆる手段、あらゆる機会を捉えて金を儲けることは決して悪いことではなく、ともかく金を儲ければ、人々から賞賛されるという考え方がある、というものであるといえる。(注10)

この作品の主人公の喬紳もまさに商人であり、この考え方の持ち主と考えてよい。商人の彼にとって「金儲け」こそが絶対的な価値であり、この基準で以て物事を見、そして人をも判断する。このためには時には手段さえも選ばないように見える。また彼は妾を持っているが、自分で「金を儲け」その金で妾を囲うことも、彼にとっては決して悪いことではなく寧ろ誇るべき、商人としての成功の証と考えるべきだろう。(注11)

では喬紳はどういう態度で、どういう商売をしているのか。このことが窺える発言を上げてみよう。

○（電話を受けて）もしもし、ワシだ……纏まった文房具だって、買え、買え！品物を見たら

買え、たとえ棺桶であっても買っておけ。分かったか。……よし、すぐに行く。(注12)

○は、は、は！もしワシが賢くなければ、ここ二、三年でこれほど大きな仕事ができるもんか。見ろ。(興奮して帳簿を示す) ワシらはここ数日で三〇万余りの品物を買入れた。文具、薬品、豆、どれも金なのだ。一日置けば一日分だけ値が上がる。二日置けば二日分値が上がる。今日の三〇万余りは、来月には七〇万に変わるだろう。半年過ぎれば或いは一〇〇万余りになるかもしれん。金よりもっと価値がある。大きな金塊が小さい金塊になることはない。ワシのこれらの品物の方は生きているのだ。麦や稲みたいに、一粒の種が百倍の粒を生み出すことができるんじや。(帳簿を渡して) 持って行け。(注13) (傍線は筆者)

喬紳の台詞に「ここ二、三年でこれほど大きな仕事ができる」とある。

この劇の時間設定は「香港陥落前」となっている。歴史年表で見れば、実際に日本軍が香港を攻撃し始めたのが1941年12月8日であり、香港が陥落したのは12月25日である。このことから、喬紳が商売で大儲けをしたのは、抗戦時期に入ってからであることが分かる。

また、この台詞から、喬紳が、多種多様な物を買込み、暫く保管し値段が上がった頃を見計らって売りに出すという「投機」商売をしていることが窺える。彼はもともと種々の知識があり、世の動きに敏感で、行動力があり、判断が素晴らしいのだが、これをこのような商売に生かしているのである。

もちろん商売なのだから品物を安く仕入れて高く売るといのは当然の行為であり、恐らくこれを否定することは難しい。だが、「抗戦」の時期に於いては事情が違う。もともと品物も不足し、値段は高くなる。もし喬紳のような商売をすれば、喬紳自身は大金を稼ぐことができるだろうが、喬紳の商売のおかげで物価はさらに上昇し、一般庶民は食べる物さえ買うことはできなくなることが考えられる。果ては、多く

の者が飢えて死んでしまうだろう。この際に、貧しい一般庶民、その中でも特に女性、子どもが最も大きな被害を蒙ることになる。さらにもっと問題なのは、この事態が「抗戦」の行方にも大きな影響を与えることになるということである。

「抗戦」状態になり、面白いように大金を稼ぐことができる状況が目の前にある。商人には「絶好のチャンス」なのだ。商人が「金儲け」の誘惑に打ち勝つのは難しい。この喬紳の場合は誘惑に負け、お金が儲かることに有頂天になり、この種の「商売」にすっかり夢中になって「友達」「抗戦」「庶民」は大切だという見方がまるで欠落してしまっている。

ただ、この作品に於けるこの種の問題は必ずしも単なる喬紳の性格という個人レベルではなく、どちらかと言えば、寧ろ中国の伝統的な商売に由来する広汎で深い現象なのであると捉えるべきだろうと考える。或いはまた、中国の商人たちの、商売はもともと「庶民」の生活のためにあるという視点の欠落が、当時の「抗戦」という事態に直面して、大きな問題としてはっきり表れ出て来たともいえるのではないか。このシンボルがまさにこの劇の喬紳なのである。

(2) この劇は、作品に詳細に描かれてはいないが、一つ、舞台として観客の目の前に存在している具体的な物語があって、その他に、この物語の背後に暗示されているもう一つの別の物語が存在している、という形になっている。この背後の別の物語は、劇の中では、最初は展開の中で暗示的に示され、後半部分で登場人物の台詞で幾らか具体的に言及されている。

最初の暗示は以下のようなもので行われている。

この劇で、喬紳は呂千秋のことを「大哥（お兄さん）」と呼んでおり、呂千秋は喬紳のことを「老弟（弟）」、また喬紳の妻のことを「弟妹（妹）」と呼んでいる。

喬の妻は呂千秋を夫と同じように「大哥（お兄さん）」と呼ぶ。呂千秋の娘の呂以美は喬紳

を「叔父（叔父さん）」呼び、喬の妻のことを「嫡母（父親の弟の妻である叔母さん）」、喬仁山を「二哥（二番目のお兄さん）」と呼んでいる。

おそらく日本人の読者には分かりにくいと思われるが、中国の独特の相手に対するこの呼び方によって、中国人の頭の中には、実際の舞台の世界ではないもう一つの世界が浮かび上がって来るのである。

呂千秋と喬紳は本当の兄弟でもないのに、何故こう呼び合っているのか。それは、呂千秋と喬紳の二人の関係が「義兄弟」であるからである。これに伴い、二つの呂千秋と喬紳の家族の者もほとんど親戚のような関係になっているのである。

このことによって、この劇の物語の背後に、呂千秋と喬紳、二つの家族の間に、この劇の物語の時間よりもっとずっと長い、楽しく、親密な、ほとんど家族的な付き合いの物語が存在していた、ということが理解できるのである。呂千秋と喬紳とは「義兄弟」であるから、お互いの総てを認め合い受け入れており、これに従って、彼らの二つの家族の子どもたちもまるで本当の「親子」「兄弟」のようであったと考えることができる。

だから、例えば、呂千秋の娘の以美が喬紳の店で仕事をしていることも次のように考えることができよう。

以美は、幼い頃からずっと「父の弟」の喬紳の手伝いをしていた。その頃は喬紳が以美の父親の呂千秋の「義弟」だったのだから、彼女は寧ろ喜んで手伝いをしていた。手伝いの中で、やがて、帳簿をつけることを学び、しだいに店の仕事をマスターしていった。この結果、現在では、以美の商人としての実力は、店の主人の喬紳の認めるところまでになったのである。

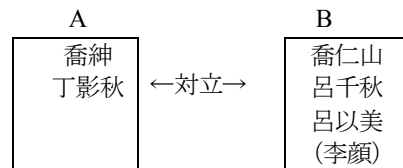
このようなことについて、最終幕で、喬の妻が、友人の呂千秋とその娘の呂以美、自分の次男の喬仁山等が去ってしまった後、夫の喬紳に話しかける台詞に窺うことができる。

○あなた、お座りになって！……(略)……ずっと昔、私たちがまだお金を儲けてなかった頃、今よりずっと楽しかったじゃないの？(注 14)

以前の喬紳は、決して裕福ではなかったけれど、家族にとっては良い父親だった。「妻」も二人の「息子」、一人の「娘」の方も父親を愛し、家庭も円満であった。しかも、呂千秋とも仲が良く、彼の娘からも慕われていた。ところが、「抗戦」時期になってお金を儲けて、喬紳はすっかり変わってしまった。これによって総ての歯車が狂い始めた。今まさに昔の「義兄弟」の関係、「家庭円満」が崩れそうになっている。この劇の物語は、ちょうどここから始まっていると考えるべきである。

4.

この作品の登場人物を、物語での役割から考えれば、以下のように二つのグループに分けることができるだろう。



A グループが「抗戦」を金儲けの好機と捉えている人物たちで、B グループは「抗戦」参加を主張する人物たちである。

したがって、基本的には、この劇はふたつのグループの対決、或いは、一方の A グループの他方の B グループに対する軽蔑、罵倒という物語の構造になっている。

では呂千秋はどのようなふう to 描かれているか。

呂千秋は、自らのことを以下のように述べている。

○ 神が自ら創造した美しい山川草花を破壊する

ことがない限り、私は醜悪に投降することはあり得ない。(注15)

- 多くの人は私が悪いという。それは私が真と美を追求し、彼らが暗黒と醜悪を喜ぶからなのだ。彼らは私と話が合わない、だから私が良くないというのだ。(注16)
- 人間であって芸術を理解できないことがあるなんて？まさか、そんなことはないだろうが、もしそうなら彼は牛ではあるまいか。(注17)

呂千秋は画家であり、芸術を理解し、正義心を持ち、年齢は五十歳余りだが、「赤子のような心を持った大きな子ども」(注18)のような人物である。

一方、商売人の喬紳は、呂千秋について、次のように述べている。

- 私たちのことは、何時だって、あなたが間違っていることが多いでしょう。あなたは大きな子どもですよ。お兄さん。(注19)
- お前の父親(呂千秋…著者注)は駄目なヤツだ。私から大金を借りて、金を持ち出して、絵をちょっと描いているのか、それとも酒を飲んでいるか、分かったものじゃない。(注20)

呂千秋と喬紳は、全く違った価値の中に生きている。

喬紳からすれば、呂千秋は、他人から平気で借金をし、その金で酒を飲み、実際の生活ができる方法を持たない、だらしない貧乏画家ということになる。

ただ、前節で述べたように、この作品にはもう一つの物語がある。これによれば、この喬紳と呂千秋の間の借金は、次のように発生したと考えることができるだろう。

呂千秋と喬紳は「義兄弟」の契りを結んでいる。「義兄弟」なのだからお互いに対する強い信頼関係がある。お金についても、喬紳は呂千秋が自分のお金を使うことを無条件で許し、呂千秋も喬紳のお金を使うことに何の抵抗も感じていなかった。お金はいつ借りても良いし、い

つか必ず返すのである。「義兄弟」の間では、これで良いのである。呂千秋は、この「借金」は、自分の絵は価値があると思っているので、いずれ自分の絵で返そうと考えている。

この劇の中で、しばしば喬紳が呂千秋の娘の以美を自分の仕事に縛り付けるために使う呂千秋の「借金」は、このような事情で発生したものであり、「借金」の額はまさに「義兄弟」であった間の長さであると解釈することができる。二人が「義兄弟」であれば、そもそもそのお金が「借金」と呼べるかどうかとも問題なのだ。

このように見てくると、この劇で、喬紳が行っている商売が内包している問題点、それによって引き起こされる結果を、呂千秋の、時代によって変わることのない芸術の価値、或いは「義兄弟」で代表される信頼関係の価値などと対比することによって明らかにしようとしている、ことが窺える。

芸術の価値と「義兄弟」の価値は似たところがある。芸術の価値も「義兄弟」の価値もお金で測ることのできないものである。時にはお金以上の価値を持つことだってある。喬紳は自分がお金を儲けたことで「義兄弟」の、何物にも代え難い価値を見失ってしまった。喬紳が呂千秋が使ったお金を「借金」と言い始めた時に、二人の「義兄弟」の関係が切れてしまったと考えて良いだろう。

呂千秋の信頼を失った結果、喬紳に何が起きたか、喬紳がどういう報いを受けたのか、この一部が次のエピソードに表されている。

丁影秋：あの日、あの人（呂千秋のこと：筆者注）が通りで絵を売っているのを見えました。とても可哀相だったので、コーヒーを一杯おごってあげました。すると、あの人はすぐオレに一枚の絵をただでくれたのです。

喬紳：通りで絵を売るくらいだから、それは、たぶん一杯のコーヒーの価値もないのだろう。だからお前に絵をただでやるのも何も不思議なことではないのだ。

丁影秋：ところが、必ずしもそうではないので

す。伯父さん。オレは専門家の処にその絵を持って行ってちょっと見せてみました。すると、その人は、何と、数千元はするだろうと言ったのです。

喬紳；えー、数——千——元だって？

丁影秋：そう、数千元です。だから、オレはあの人に展覧会を開いて、もっと適切な値段で売れば良いじゃないかですかと勧めてみました。でも、どうしても承知しないのです。あの人の話は、あんまり良く分からないのですが、一言だけはっきり理解できました。それは、自分の絵は売るためのものではないのだ、ということです。それで、まあ仕方なく、あの人がオレにくれた絵を三千元で売って、その金を以美に渡しました。

喬紳：本当か！仁山、あいつらの処に行け、早く。

丁影秋：出て行きました。あの人は、たぶん、もう出て行きましたよ。

喬紳：そんなことはない。ワシはあいつの性格をよく知っている。金が手に入ったらすぐ酒飲みに行ってしまうのだ。そして酒場でグデングデンになるまで飲むはずだ。仁山、あいつのところへ行け。ワシがあいつの絵を半分はワシの借金の返済に回し、半分は普通の値段で買ってやる。それらを持っていれば、十年、八年後には、かなりの値段になるだろう。ワシがそれを買わなければ、あいつのことだから、遅かれ早かれ人にただでやってしまうだろう。仁山、早く行け。(注21)

たとえ呂千秋を自分の処に引っ張ってきたとしても、呂千秋の性格からして、恐らく、もうすでに喬紳に自分の絵を売るなどということは絶対に考えられない。にもかかわらず、喬紳がもしこのこと、つまり自分がすでに失ってしまったものに本当に気づいていないのであれば、寧ろ滑稽でさえあると言わざるを得ない。

5.

次に喬紳山の描き方を考えて行く。

第一幕で、今日次男が帰ってくると伝えられるのに、喬紳の反応は余りにも冷たい。「廢物を迎えに行く時間はない。」(注22)と言い放ち、迎えに行こうともしない。

○ 次男は今日帰ってくる。あいつは死んではないが、ほとんど死人と同じだ。(注23)

○ 仁山は廢物だ。あいつはワシを手伝うなんて出来ん。(注24)

この劇では、仁山は全く商売ができない、この種の能力が全くない、どうしてもなく愚かな息子として登場してくる。

主人の喬紳は、次男の仁山にはとても自分の店を任せることはできないと思っている。ただ幸いなことに、店には義兄の娘以美がいる。以美は次男に較べて遙かに帳簿付けが上手で、実務能力が優れている、自分の店を存続、発展させるために、この以美を仁山と結婚させるしかない。このような思惑があるので、時には強引に、時には甘言を弄して、以美に仁山との結婚を承諾させようとしているのである。

この時の仁山の役割は、以美を獲得する駒にすぎない。喬紳は、仁山がそれぐらいの能力しかないと見ているのだ。仁山にとってこの上ない侮辱である。

○もしお前があいつと結婚したら、お前はワシを手伝い、あいつをリードするのだ。そうすれば、ワシの事業は更に大きく発展するだろう。ワシは他人を信用しない。だから、お前はワシの息子の嫁になり、身内に変わらなくちゃいけないのだ。お前たちが結婚すれば、ワシには助手ができ、お前には活路が生まれ、仁山には賢い妻ができる。こうなれば、お前の父親の借金だって帳消にしてやるぞ。(注25)

父親の喬紳にこのような評されている次男の

仁山は、実際はどういう人物か。これを見てみよう。仁山本人の登場は第二幕になる。

喬仁山：(母親を支えて入ってくる)以美、いつもそんなに忙しくしているのか。

呂以美：忙しくなくできる方法はないかしら。

お兄さん。(頭を下げて仕事をしている)

喬仁山：ああ、ある人は、彼の忙しくすべきでないことを忙しくし、ある人は、別の人がその忙しくすべきでなくことを忙しくするのを手伝っている。これこそが「抗戦」の力を減少させているのだ！

喬の妻：(ハンカチを拾い上げ) 仁山、お前は、いつも、いつも、こんな言い方ばかりして！だから、お父さんは聞くのを嫌がるのだよ。

喬仁山：でも、親父が聞くのが好きなことを、僕は言うのが嫌いだ。親父は算盤の音を聞くのが好きだが、僕は算盤じゃない。親父はお札が擦れる音を聞くのが好きだが、僕はお札じゃない。

喬の妻：ねえお前、私のために、お前のお父さんと上手くやってくれないか？私はお前のために、何かとたいへんなのだ。(注26) (傍線は筆者)

この仁山と母親との遣り取りに微妙なずれが生じていることが分かる。

仁山は、この劇の登場人物の内では、唯一のインテリである。このためか、仁山の発言は他の登場人物に比べ婉曲的、且つ含蓄に富んでおり、母親には、仁山が何を言っているのかどうもはっきり理解できないというふうなのである。

ただ、これらの仁山の発言を吟味すると、一見、仁山は、父親の喬紳に非常に反抗的な態度を取っているように見えるが、実は単純な反抗ではなく、寧ろ発言内容は事の本質を突いていることが分かる。仁山は家に戻ってくる前に、すでに父親がどのように商売をしているか、それが社会にどのような影響を与えているのかを

よく知っていたと考えるべきだろう。だから、いきなり、父親の商売は「抗戦」の力を減少させている！」等と言うのである。良心からして、父親の仕事に協力することはできない、いや誰も仕事に協力をしてはいけないと明言しているのである。

この仁山の態度は一貫していて、また、例えば以下の発言にも同様のものを見て取ることが出来る。

喬の妻：お前は どうして香港からハンカチ、絹のストッキングを持ってこなかったのだ。お父さんがあれほど何十回も言いつけたのに。ものを持ってくるようにさせても、お前は どうしても聞かない。ハンカチ、絹のストッキングだって、何も持ってくるのが大変いうのではないだろうに。

喬仁山：ものを持ってくるのは寧ろ簡単です。でも、良心がそんなふうに簡単ではないのです。(注27)

だが、母親や以美はそうではない。彼女たちは、仁山の父親に対する反抗の本当の意味が全く分かってない。彼女たちは仁山が余りにも父親に反抗的で、しかも何か訳の分からないものに苦しんでいると思っている。だから、彼女たちは仁山のことを、母親として、「義理の」妹として、真から心配しているのである。もちろん仁山にもこの言葉が母親や以美の善意から発せられたものであることはよく分かっている。が、しかし、この善意であるはずのこの二人の心配も、皮肉なことに、仁山には時には重荷になり、彼を苦しめることになっている。

呂以美：お兄さん。もっと胸をはりなさいよ。

意義のある責任を背負って、つまらない責任は下ろしちやいなさいよ。憂慮と苦悩は何の役にも立たないわ。

喬仁山：分かった。分かったよ。でも僕は自分の心の上の石をどうしても押しのけられないんだ。

呂以美：何かしたら。何かしなさいよ。

呂の妻：そうだよ。何かおやりなさい。小さなことだってかまわないよ。お父さんを手伝って、お父さんに可愛がってもらいなさい。

喬仁山：僕が親父を手伝ったら、親父はもっと大きな悪徳商人になってしまうじゃないですか。

喬の妻：お前どうしてそんなふうに言うの？いづれにしても！あの人はお前の父親だよ。

喬仁山：いづれにしても、あの人は私の父親です！いづれにしても、です！一切は皆「いづれにしても」だ！人が、あの人がチンピラでも、チンピラに服従すべきだと言ったら、僕はやっぱり服従しなければならないのだろうか！人が、あの人は金持ちだから、金持ちを崇めるべきだと言ったら、私はやっぱり崇めなければならないのだろうか。

喬の妻：ああ、どうにもならないね。私にはどうも分からない。お前をやっとのことで呼び戻してあげたのに。お前ときたら、こんな様で。

呂以美：お兄さん、おばさんをこんなに悲しませちゃ駄目よ。（注28）（傍線は筆者）

普通であれば、息子が素直に父親の仕事を手伝い、父親とも仲良くやって、店をますます発展させる。これが親孝行な息子の取るべき態度なのである。こうであれば父親にも好かれ、母親も喜ぶだろう。だが、息子の仁山はこうではない。父親の仕事を手伝わないばかりか、寧ろ批判し、反抗ばかりしている。こんなふうだから父親にも嫌われている。これを、母親は嘆き悲しんでいる。この時、この息子は親不孝に見える。

この仁山は本当に親不孝といえるか。

仁山の「抵抗」「反抗」は、父親の商売内容に関わっている。父親の商売は、庶民を苦しめ、「抗戦」の力を弱めてしまう、父親の仕事に手を貸せば、父親の仕事の害をさらに広げ、父親を「もっと大きな悪徳商人」にしてしまう。だから手伝わないのである。このことは、父親自

身にとっても本当は良いことである。心から父親のことを思っているのである。この点では寧ろ親孝行な息子であると言えるだろう。

これが母親たちには分からない。分からないばかりか、仁山が発言すれば、寧ろ母親たちは、父親のことを批判ばかりする（母親には父親を悪く言っていると聞こえる）と怒る。母親を悲しませたくはない。だが、父親に同調することは絶対に出来ない。しかし、何も知らない母親は父親の仕事を手伝え、父親と仲良くしろと迫るのである。

では、実際に、父親の喬紳は、息子の仁山をどのように扱っているのだろうか。喬紳に協力的な、まるで弟子のように可愛がられている丁影秋も登場して来る場面で、これを見てみよう。

喬紳：……（略）……物価問題については、細心に研究したことがある。いいか、今日タバコがちょうど値が上がったとする。他のもの、例えばマッチにしようか。値が上がらない、何の動きもない。二日経って、タバコがまた値を上げた。が、マッチや他のものはまだ動かない。お前はここのままマッチが動くはずがないと思うだろう？フン、ずっと見ている。突然ある日、マッチに孫悟空のトンボ返りがやってくるぞ。あっという間に、十万八千里だ。やがてそれがタバコを追い越してしまう。もしお前がマッチを持っていたら、どうだ、一本が万利を生むなら、たちまち大金持ちじゃないか。だから、ワシたちは「不変」を「万変」に換えねばならない。何が「不変」なんだ？言ってみろ。

丁影秋：買う。持っておく。

喬紳：その通り。（注29）

喬紳がマッチの値段を持ち出して例えている。このようなことを、実際に喬紳たちが行っているのである。

マッチの値段が安い。それを大量に買い込んで、抱え込み、品薄状態を作り上げる。するとマッチは値段が少し上がり始める。値段が上が

り始めれば、その値段を見て、他の商売人も買い込み始めることになるだろう。そうすればマッチはますます品薄になり、値段はさらにはね上がる。その頃にマッチを売るのである。このような商売が社会にどのような影響を与えるか、もはや言うまでもないだろう。

丁影秋の方は、この番紳の商売方法を受け入れ、積極的に共に大儲けをしようと企んでいる。だから積極的に協力する。これが、周りの人たちには、皮肉なことに、丁影秋が商売の能力があり、一生懸命に番紳の仕事を手伝っているかのように見えるのである。

一方、仁山の場合はどうか。

番紳：……(略)……(仁山に向かって)仁山、さっきの話、お前聞いていただろう。

番仁山：聞いていました。

番紳：じゃ言ってみろ。買う。持っておく。お前、できるか？

番仁山：(無言)

番紳：言えないのか？

番仁山：できますよ。買う。

番紳：買う。それからどうなんだ？

番仁山：持っておく。どちらも——

番紳：どちらも何なんだ？

番仁山：どちらも、くそつたれだ！

番紳：(激しく怒って) 馬鹿者！この馬鹿タレが！(注30)

このような父親に対する対応によって、父親には、仁山は商売のことが分からない愚かな人物であるばかりか、自分に反抗ばかりしている、とんでもない親不孝息子のように受け取られる。だが、実際は、そうでないことは、すでに今まで見てきたところから明らかである。

だとすれば、この場面で起こっているのはどうということか。

この場面の解釈に、まず押さえておかねばならないのは、息子の仁山は父親想いで、心の優しい人物であり、今でもなお父親が好きで、本気で父のことを心配している人物なのだという

ことである。仁山は、父親の意向に沿い、自分が父親の仕事を手伝えば、この害毒をもっと社会に広くばらまくことに荷担してしまうことを知っている。仁山は、父親を愛しているからこそ、せめてそれだけはしたくない。また父親を愛しているからこそ、父親にもそのような商売をして欲しくない。できれば、昔の優しい父親に戻って欲しいのである。

だから、この場面では、このような本当は立派な息子を、父親の番紳の方は却って「無能」だとか、「廃人」だとか、「馬鹿者」だとかと罵っているのであり、逆に、父親を欺き、適当に利用しようとしている人物を「有能だ」と褒め称えるという奇妙なことが起こっているのである。この時の父親の「愚かさ」は寧ろ滑稽でさえあるといえるかもしれない。

既に、観客は、劇のストーリーの展開から、仁山が父親想いの、心の優しい青年であることに気づいている。だから、観客には、父親が仁山を容赦なく罵れば罵るほど、却って父親の愚かさがますます際だって見えるはずである。だからこそ、観客は仁山に同情し涙を流すだろう。また既に仁山の発言の意味を理解した観客は、父親に怒りさえ感じ始めることになると思われる。この劇は、このような形で周到に番紳や、彼の商売に対する批判が行われている。

6.

この作品で、番紳に正面から堂々と自分の意見を言うのは呂以美だけである。以美は、現在、父親の呂千秋が作った番紳への「借金」を返済するために、番紳の店で仕事をしている。この以美に、番紳は自分の息子との結婚を承諾するようにと再三迫る。

呂以美：叔父さん、子どものことは子どもに任せれば良いではないですか。叔父さんがそんなふうに心配することはないですよ。

番紳：余計なことは言わんで良い。ワシはお前

に一目置いているから、お前にこんなにクドクドと言っているのだ。ワシの怒りを招くようなことはするな。分かるな。ワシの長男は死んだ、次男は役立たずなのだ。

呂以美：仁山兄さんは、役立たずなんかではありません。

喬紳：よく聞け！二人の息子は、一人は死に、もう一人は半分死んでいる。ワシが心配しなければ誰がこの一家を養ってゆくんだ。お前がもし仁山に嫁いでさえくれれば、ワシに一人息子が補充されたようなものだ。その上、莉香が丁影秋に嫁げば、ワシにはまた一人息子が増える。影秋は金持ちではないが、間違いなく見どころがある。ワシと影秋が外のことをやり、お前が内のことをやれ。そうすればこの家は鉄の桶のようになる。（興奮して）ワシの頭脳、影秋の脚、お前の手に依って、ワシたちの金は二倍、三倍、十倍、百倍と増えて行き始めるだろう。そうすれば、ワシたちは実業家、金融家となるだけでなく、永遠に倒れない力を打ち立てることさえできる。政権が誰の手にあつたとしても、我々は常に上流の人物としておられるのだ。考えてみろ。お前はたかが貧乏画家の娘にすぎんのだ。なのに、ワシの家の嫁になるチャンスを捨てるとでもいうのか。お金、勢力、楽しさ、車、これらのものがみんなお前を待っているんだ！お前は馬鹿じゃないから、このことが分かんことはなからう。

呂以美：理想というのは人によってそれぞれ違います。叔父さん！

喬紳：馬鹿なことをいうな。さあ言え、どっちなのだ、「はい」か、それとも「いいえ」なのか。（注31）

呂以美にすれば、仁山との結婚は、普通であれば、喬紳の家は大金持ちなのだから、玉の輿に乗ったと言っても良いだろう。

また、呂以美には、結婚相手の仁山も立派な人物であり、喬の妻もとても優しい人物である

ことも分かっている。この点でも問題はない。それでなおかつ、喬紳が昔のように自分の父親の呂千秋と「義兄弟」の中で、呂千秋を尊敬し、且つ自分の家族を可愛がっているのであれば、呂以美は、この結婚の申し出に間違いなく承知しただろう。ところが、呂以美は、即答は微妙に避けているものの、必ずしもこの話に承諾しない反応を示している。

では、呂以美が、これほどの良い条件の結婚を拒むのは何故か。

以美は、仁山とは違い、必ずしも喬紳の商売があくどいものであることに気がついていない。だから、この点から喬紳を嫌っているのではない。そうではなく、呂以美は母親がいなく父親一人であり、この父親を尊敬しており、また大好きなのである。ここに、以美の喬紳に対する嫌悪は関わっている。

父親の呂千秋は今でも喬紳が以前の「弟」でなくなったことを知らずまだ信用している。なのに、喬紳は呂千秋がこうであることを知っており、呂千秋の前では、いかにも「弟」のように振る舞っているが、裏では、呂千秋のことを軽蔑し、時には秘かに罵っている。喬紳は一方的且つ秘かに義兄の呂千秋を裏切っているのである。このような喬紳の言動や態度を以美は直接見聞きして知っている。だから絶対に許せないのである。

この事実を父親に告げ口することはしない。ただ喬紳を信用し続けている父親が可哀相だと思ひ、父親がこの事実を知って失望、落胆するのではないかとまで心配している。また、以美は、父親の借金にしてもそれが借金である以上それはきっちり返すべきだという気持ちも強い。

つまり、ここでの喬紳批判は、父親のような純粋無垢な人物を平気で汚すようなものは絶対に許すことができないという態度、自分も人の道に外れるようなことはしないという気持ちに由っている。或いはこれを「義侠心」「正義心」とでも言うことができるかもしれない。こういう真っ直ぐものを以美は持っているように

みえる。

このようなものも、庶民にとっては極めて重要な徳目のひとつである。これを簡単に破るような人間は絶対に信用されない。この理屈は一般の人にも明快で分かり易い。この劇では、この理屈からの喬紳に対する批判が行われていることができる。

7

喬紳の下から、旧い友人であった呂千秋、その娘の以美、そして自分の息子の喬仁山といった大切な人が去って行く。

では、喬紳に協力的で、忠実なまるで弟子のようであると思われた丁影秋の場合はどのように描かれているのか。

喬紳はこの人物の腕前を高く買い、彼に自分の娘、莉香を与えることで、自分の身内にしてしまい、将来自分の片腕として働かせようと目論んでいた。

○おそらく、ワシは莉香を手放すことになるだろう。あいつ（丁影秋…筆者注）は莉香を手に入れる前は、たぶんワシを十割の力で手伝おうとはしてなかった。一旦ワシの娘婿になったら、あいつだって文句はなかろう。本当は、ワシは莉香を手放したくはない。娘には交際の才能があり、だいぶワシを助けてくれる。でも、影秋はとても役に立つヤツなのだ。ヤツの心を買っておかねば、ヤツはワシのために一途に仕事をするはずはない。(注32)

この結婚を心配する人物がいる。莉香の兄、喬仁山である。仁山は「丁影秋はチンピラだ」(注33)と見て、この男と結婚すべきでないと、莉香にこの結婚を思いとどまらせようとする。ところが、このことが分かっても、不思議なことに、莉香はこの結婚を積極的に受け入れようとする。というのは、莉香には弱みがあったのである。

喬莉香：お兄さん。

喬仁山：一体どうしたっていうんだ。

喬莉香：お兄さんはお母さんの心を傷つけるのを恐れているのね、でも、私はお母さんに会わせる顔がないわ。だから絶対に結婚しなければならないのよ。

喬仁山：何故だい？

喬莉香：私、私子どもができたの！

喬仁山：エー、何だって、お前にか？(暫く黙り込んで、それから)影、影秋の子どもか？

喬莉香：分からない。

喬仁山：分からないだって？

喬莉香：本当に分からないの。お父さんが、お母さんに厳しくすることを禁じ、ただひたすら毎日私を交際の場に引き出し、そうして商売上手く行くようにしたわ。厳しくする母親がいなく、ただ寵愛する父親だけの娘に、慎むなんてことが分かるわけじゃない。だから、私、今、絶対に一人捉まえなくちゃならない。私は影秋を捉まえなくちゃいけないのよ。これからはもう影秋をチンピラなんて言わないでちょうだい。チンピラは私たちの家にもいるのよ。(注34)

莉香に相手が誰だか分からない子どもが出来てしまったのである。もし相手が分からない子どもが生まれたことを人に知られれば、何を言われるか分かったものではない。そこで、丁影秋に白羽の矢を立てた。莉香は、自分を美人だと思っているし、まして大金持ちの喬家の婿になるのだから丁影秋には何も異存はないだろうと考えたのである。

ところが、丁影秋は実際には喬紳を嫌っておりその娘も本当に愛しているわけではなかった。

以下は喫茶店での丁影秋と桃雲の会話である。

桃雲：丁さん、ここを出て行きましょう。早くししてちょうだい。この二日、心臓が飛び出すくらいどきどきしているわ。計画がばれでもしたら、バカバカしいでしょう。

丁影秋：気を落ち着けろ。慌てるな。オレはも

っと金を騙し取らねば、喬の旦那を許すことができねえーんだ。この世に生まれてこの方、こんなに順調なことに出会ったためしがない。今回は財運、女運が一斉にやってきやがった。上出来だ。喬の旦那は確かに賢い人なはずだが、金に心を奪われ、オレなんぞを信用するなんて、何てトンマなこった。かなりの額の香港ドルがオレの手の中にあり、お前がオレの手の中にあり、莉香の指輪だってオレの手の中にある。ふん、しかも、あいつ、オレに多くの接吻をタダでプレゼントしやがった。(注35)

丁影秋は、最初から喬紳に従うつもりはなく、また、喬紳の娘と結婚するつもりもなかったのである。今や、すでに彼は喬紳や莉香を欺き、お金を騙し取り、喬紳の妾の桃雲を連れて、ここから逃げ出すことを考えている。

その逃げ出し方も尋常ではない。大胆にも以下のような計画を立てている。

丁影秋：（桃雲に向かって）もう間もなくのことだ。でもあんまり慌てては駄目だ。オレはお前に見せたいんだよ。オレには、喬の旦那にオレたちを正門処まで見送らせ、お互いに恭しく握手を交わし、それから急がず慌てず飛行機に乗ってだな、空中で旦那に「あばよ！間抜けヤロウ！」と言うことができるってことをな。(注36)

この計画もまふまふと成功することになる。計画通り、丁影秋は喬紳と握手をし、桃雲を連れて、正面玄関から堂々と出て行くのである。ここに至って喬紳は笑いものになっている。

何故こうなったのか。

喬紳のような商売をすれば、その喬紳と同じような商売をする連中、或いは喬紳のお金に群がる連中が、喬紳の周りに集まってくるだろう。或いは逆に喬紳の方もこのような連中と積極的に関係を持つ必要が生じたとも考えられる。

この連中はお金を儲けるためには何でもする。

例えば自分が儲けるためには人を騙すことなど平気なのだ。だから、こんな連中はもともと信用できないのである。喬紳もこのことは承知していたはずである。

ただ、丁影秋の場合、喬紳は、自分の娘の婿になりたがっている人物だと思っていたので油断したのだろうが、丁影秋だってもともところいう連中の一人なのである。だから、当然、最初から丁影秋が喬紳を騙す可能性が大いにあったし、また同時に丁影秋の方だって喬紳から騙される可能性もあった。このことを丁影秋の方は充分知っていて、言わば、その通りにしただけのことである。この点では、必ずしも丁影秋だけが悪いと言えないのである。

この件では、明らかに喬紳の方が徹底してなかったといえる。このことを、息子の仁山が「影秋は正真正銘のゴロツキ、父さんはそうじゃない。あなたは、あいつに太刀打ちなんて出来ないですよ。」(注37)と言っている。丁影秋の方が一枚上手だったということなのである。

これだけではない。喬紳は、このような商売をする連中と関わり合って、自分の身内に犠牲者を出している。娘の莉香である。

喬紳：莉香、お前以美を見に行ってこい。あいつを二度と逃がすんじゃないぞ。

喬莉香：いやよ。

喬紳：お前もワシの言うことを聞かなくなったか。

喬莉香：お父さんの言うことを聞いたから、私は馬鹿を見ちゃったのよ。

喬紳：どんなふうに馬鹿を見たのだ？

喬莉香：大馬鹿を見ちゃった。お父さんが私を接待や付き合いの席に出させたので、多くのボーイフレンドを持ってしまったわ。

喬紳：だからどうだっていうんだ？

喬莉香：男たちはみんな不誠実だった。

喬紳：彼らがワシ等の仕事を手伝ってくれさえすれば、小さな、幾つかの不謹慎なところは、当然ながら、許さないことはない。お前は賢いから、まさか貞節を失ってしまう

ことはなかっただろう。

喬莉香：私、私お母さんになってしまったの。

喬紳：なに？何だって？この面汚しが。嗚呼、

天よ、あなたは、どうしてワシだけをこんなにまで、ひどい目に遭わせるのか。息子は器ではない。娘には私を手伝ってくれることを期待していたのだ。なのに、実際は何も手伝ってくれなかったばかりか、ただワシの面目を潰すことだけをしっかり手伝ってくれよった。

喬仁山：お父さん、これでもまだ目が醒めないんですか！あなたがお金を儲けたぶん、娘が犠牲になったのですよ！（注38）

父親の商売は、これに協力する身内のものも犠牲にする。父親はすでに満身創痍になっている。もうこの商売を止めるかと思われた。しかし、この事実にもめげることなく、まだなお商売を続けようとする。

8.

最後にこの劇に「狂人」として出てくる長男の嫁の李顔について言及しておきたい。

既に見てきたように、作者は、この劇で、喬紳の商売に対し、あらゆる方向からの批判を浴びせている。呂千秋、呂以美親子の方からの批判、息子の喬仁山から行われる批判、そして協力者であった丁影秋からの批判、そして喬紳の商売の犠牲者となった喬莉香からの批判である。

「読む」という小説というジャンルからすれば、これだけで十分に作者の意図が読み取れるだろう。ところが、劇として「上演」することを考えれば、例えば喬仁山の場合に見られる婉曲的な表現などは、幾らかの観客は、俄には作者の真意を理解することができない可能性もある。この不安を一挙に解決してくれるのが、長男の嫁、李顔の存在であると考ええる。この存在こそが、あたかも灯台のように、この物語が最終的に向かう方向を示してくれるのである。或

いは、李顔の台詞によって、この作品が「抗戦劇」であることがより明確になっているともいえるかもしれない。

この女性の主張は「自分の最愛の夫が日本軍に殺された。だから、その日本軍に対して敵討ちをすべきである。」というものである。劇中で、この主張を絶えず執拗に繰り返す。これはもともと、家族であるものが持つべきものと考えることが出来る。

一つだけその場面を挙げておこう、以下は仁山に向かって言う台詞である。

李顔：（そっと入ってきて彼の後ろに立つ）仁山！

喬仁山：ああ姉さん！姉さん！

李顔：あなたはお兄さんに何を話していたの？

お兄さんはあなたに何を言ったの？

喬仁山：兄貴は――

李顔：分かっているわ。お兄さんはあなたに敵討ちに行けって言ったんでしょう！

喬仁山：敵討ち？

李顔：お兄さんは毎日言っているわ。弟は必ず敵を討ちに行くはずだって。行くんでしょ？行くわよね。行くの、行かないの？

喬仁山：お姉さん！お兄さん！お姉さん！（泣く）

李顔：泣くんじゃないの！見なさい。私は笑っているでしょう。男子だったら、敵討ちするのよ。

喬仁山：お姉さん、僕はきっと敵討ちに行くよ。

李顔：私にはとっくに分かっていたわ。あなたのお兄さんが私にそう言っていたから。

喬仁山：でも、お姉さん、お母さんをどうしたら良いんだ？あなたをどうしたら良いんだ？妹をどうしたら良いんだ？以美をどうしたら良いんだ？

李顔：あっちへ行って。行きなさい。お母さんの胸に倒れ込んで、おっぱいを飲ませてもらえばいいわ。あんたのお兄さんはむざむざ敵の手にかかって死んでしまったのよ。なのに、これまでずっと仇を討ちに行く人

なんかいなかった！あっちに行きなさい。行って、お父さんのお金儲けを手伝えなさい。お金を一杯儲けなさい。そうしたら、そのお金があんたたちを埋めてしまうわ。棺桶みたいにあんたたちを埋めてしまうのよ！

喬仁山：お姉さん！お姉さんは僕のことが分かってないんだ！

李顔：もう二度と私をお姉さんと呼ばないで。狂人と呼ばないわ！私、あなたのお姉さんなんかではないわ！あの人も、あなたのお兄さんなんかではないわ！この意気地無し！

喬仁山：お姉さん、(叫ぶ)僕を二度と責めないで。もう少し考えさせて下さいよ。

李顔：ペイ！（注39）

この劇では、李顔は一貫してこの主張を繰り返す。観客で「抗戦」を主張する人には、この李顔の言葉はスローガンとして心地よく響くに違いない。

とはいえ、この場面で仁山が言っているように「抗戦」に参加すると決心することも、実際には、そう簡単ではないだろう。「抗戦」に参加する本人も「何を守るために戦うのか」「残される家族をどうするか。」に答えを見つけ出し、一方、「抗戦」に参加させる家族の方も肉親の参加を納得し、「抗戦」によって起こる総てを受け入れると心を決める必要がある。なぜなら「抗戦」に参加すればもしかしたら戦死してしまうかもしれないからである。だからこそ「抗戦」に参加するには、参加するまでに乗り越えておかねばならないハードルが幾つもあるのである。

この登場人物、喬仁山は、このハードルを総て越えただろうか。喬仁山が家を出るとき、最愛のお母さんに向かって言うのが次の台詞である。喬仁山は以下の言葉を残して「抗戦」の行われている前線へと向かうのである。

○お母さん、僕は冷酷な人間ではありません。

香港から帰って、もともと、まず家のことをきちんとしてから、それから国のために力を尽くしに行こうと考えていました。その第一番目のことは、お父さんを説得することでした。お父さんにもっと目を大きく開き、大きな処を見て、自分の利益だけを見て欲しくなかったのです。でも、僕の話はまるで大海に降る雨のようでした。何の効果もありませんでした。数日前、香港が焼かれ、桃雲が逃げるに及んで、僕は絶好の機会が来たと思いました。でもお父さんはもっと変になってしまいました。悪魔に取り憑かれたみたいなり、僕を仇のように見なすようになってしまったのです。もうグズグズしてはいられません。水滴を石の上に空しく落としている訳にはいかないのです。僕はもう待てません。家を改善することが出来ないばかりか、報国の機会さえも逃してしまうのが恐いのです。僕はすぐ出かけます。僕が行くのは、一つはそれぞれの青年が果たすべき義務を果たすためであり、もう一つは父親のために国や社会に罪滅ぼしをするためです。お母さん、理解してくれますよね？僕を許して下さいますよね？（注40）

9. おわりに

この作品創作のきっかけになったのは、やはり戦争下で実際に起こっていた物価高騰であると考えられる。この劇には、この物価高騰を引き起こしている商人たちの投機的な商売への老舎の憤りの深さが良く出ている。このようであるから、この劇は、この状況に同じように苦しめられている当時の人々には共感を持って受け入れられたのではないと思われる。

今回の分析でも明らかなように、この劇はとても良くできている。種々の人物を使いながら、それぞれの人々の価値観から、喬紳の商売を批判する形になっている。このことは、この劇をどのような観客でも理解できるということであり、どの観客もこの劇を見て喬紳の商売を嫌悪をするということである。この点で、この劇は

社会風刺的色彩がとても強い作品であるといえるかもしれない。ただ、このことを作者も知っていて、諷刺だけに終わらず「抗戦」参加のメッセージもきちんと挿入している。ここでの役割を担っているのが李顔である。作品では、彼女に一貫して「日本軍と戦え」を叫ばせている。

まだ、この作品を論じ尽くしたわけではない。この劇がハッピーエンドで終わっていることや「喬紳の妻」についても、もっと考える必要があるだろうと思っている。また、台詞を吟味すると、この劇には、喬紳に非常に滑稽なことを言わせている部分がある。このことから、ここで取り扱われている問題はかなり深刻だが、この劇は、極度に深刻に演じるのではなく、寧ろいくらかユーモラスに軽く演じてこそ、老舎の真意が伝わるのではないかと考えてもいる。

さらに、これから他老舎の劇も考察し続けて行きたい。(完)

【注】

この小論のテキストは『老舎全集9』（人民文学出版社・1999）に収められているものを使用した。したがって、以下の【注】に付されている作品のページは『老舎全集9』のものである。なお、この作品は『老舎劇作全集1』（中国戯劇出版社・1982）や『老舎文集第10巻』（人民文学出版社・1986）等にも収められている。

- (1) 老舎の『帰去来兮』は五幕劇で、1942年6月20日から29日まで重慶の『新蜀報』の副刊「蜀動」（第733期から745期）に連載された。
- (2) すでに、拙論「老舎『残霧』試論」（八戸工業大学紀要第25号・平成18年2月）、拙論「老舎『国家至上』試論」（八戸工業大学紀要第26号・平成19年2月）拙論「老舎『張自忠』試論」（八戸工業大学紀要第27号・平成20年2月）拙論「老舎『面子問題』試論」（八戸工業大学紀要第27号・平成21年2月）で論じたことがある。
- (3) 老舎自身が自らの劇について述べた文章には、「閑話我的個話劇」「三年写作自述」等がある。この文章は『全集』を初め、『老舎劇作全集1』（前者のみ）や『老舎研究資料』（北京十月文芸出版社）で読むことができる。
- (4) 杉本達夫氏は『日中戦期 老舎と文芸統一戦線』（東方書店）で、抗日期の老舎の劇を取り上げ論じている、この中で中国の種々の文学史の記述を取り上げ、そこから「文学史が郭沫若の一連の史劇や茅盾の『清明前後』をはじめ、抗戦期の劇作家と作品に多くの紙面を割いているなかで、老舎作品に関する記述の少なさは、老舎の劇作品の二重の小ささの表現であり、作品が長い生命を持ち得なかった事の表現である。」（「老舎と抗戦劇」p.170）と述べている。
- (5) 老舎の小説と劇との違いを取り上げて論じた文章はまだ書いていない。ただ、小説に関して、既に幾つかの作品を取り上げ、発表した。○老舎『老張の哲学』私論（『集刊東洋学』57号・1987）○老舎『趙子曰』試論（『八戸工業大学紀要』第9巻・1990）○老舎『二馬』試論（『八戸工業大学紀要』第10巻・1991）○老舎『小坡の生日』試論（『八戸工業大学紀要』第11巻・1992）○老舎『猫城記』試論（『八戸工業大学紀要』第12巻・1993）○老舎『離婚』試論（『八戸工業大学紀要』第14巻・1995）○老舎初期作品と『駱駝祥子』（『八戸工業大学紀要』第16巻・1997）○老舎『牛天賜伝』試論（『八戸工業大学紀要』第17巻・1998）○老舎『文博士』試論（『八戸工業大学紀要』第18巻・1999）○老舎『微神』試論（『八戸工業大学紀要』第19巻・2000）○老舎『月牙兒』試論（『八戸工業大学紀要』第20巻・2001）○老舎『蛤藻集』の「悲劇」について——消えゆく「伝統」——（『八戸工業大学紀要』第19巻・2002）等
- (6) 『帰去来兮』第一幕p.457

- | | |
|---|----------------------------|
| (7) 『帰去来兮』第一幕 p.459 | (22) 『帰去来兮』第一幕 p.462 |
| (8) 『帰去来兮』注 p.463 | (23) 『帰去来兮』第一幕 p.463 |
| (9) 老舎の『老張的哲学』はまさにこの種の作品の代表格だろう。この作品で表される商人の考え方は、この作品を考える時に参考になる。詳しくは「老舎『老張的哲学』私論」（『集刊東洋学』57号・1987）を参照していただきたい。 | (24) 『帰去来兮』第一幕 p.464 |
| (10) 同上 | (25) 『帰去来兮』第一幕 p.464 |
| (11) 同上 | (26) 『帰去来兮』第二幕 p.480 |
| (12) 『帰去来兮』第一幕 p.461 | (27) 『帰去来兮』第二幕 pp.480-481 |
| (13) 『帰去来兮』第一幕 p.476 | (28) 『帰去来兮』第二幕 pp.482-483) |
| (14) 『帰去来兮』第五幕 p.533 | (29) 『帰去来兮』第二幕 pp.487-488 |
| (15) 『帰去来兮』第一幕 p.458 | (30) 『帰去来兮』第二幕 p.488 |
| (16) 『帰去来兮』第一幕 p.458 | (31) 『帰去来兮』第二幕 p.477 |
| (17) 『帰去来兮』第一幕 p.460 | (32) 『帰去来兮』第二幕 p.475 |
| (18) 『帰去来兮』第一幕 p.461 | (33) 『帰去来兮』第二幕 p.485 |
| (19) 『帰去来兮』第一幕 p.464 | (34) 『帰去来兮』第四幕 p.510 |
| (20) 『帰去来兮』第一幕 p.464 | (35) 『帰去来兮』第三幕 p.493 |
| (21) 『帰去来兮』第四幕 pp.512-513 | (36) 『帰去来兮』第三幕 p.494 |
| | (37) 『帰去来兮』第四幕 p.517 |
| | (38) 『帰去来兮』第四幕 p.518 |
| | (39) 『帰去来兮』第二幕 p.492 |
| | (40) 『帰去来兮』第五幕 p.530 |